

巻頭言 少子高齢化社会の到来とAI（人工知能）時代

福山平成大学福祉健康学部
学部長 永井純子

今年もお陰様で福祉健康学部研究第13巻（平成29年度版）が発行される運びとなった。編集委員長ならびに査読者の御協力により学術論文水準が確保できたと感謝申し上げます。

さて、我が国の近未来は深刻な「少子超高齢社会の到来」が予測されており、数十年先には現在の社会システムそのものが成立しなくなると言われている。また、我が国の生産年齢人口は2060年には4,418万人（2010年の45.5%減）にまで減少することが推定されており、このまま進むと、従属人口指数（生産年齢人口に対する年少・老年人口全体の扶養負担）が高くなり、生産年齢人口が従属人口を支えきれなくなる時代が来るということである。

一方、AI（人工知能）やIoT（インターネットを媒介して様々な情報が「もの」とつながる）、全てとつながるIoE（Internet of Everything）が飛躍的な広がりを見せている。2045年にはAIが人間を超える日（Technological Singularity）がやってきて、今、人間社会に存在している仕事のうち、約6割はAIに取って変わられるだろうと言われている（2045年問題）。人間が生み出したAIは人間にとって大変な魅力でもあり脅威でもある。この諸刃の剣をどう使いこなすかが問われる時代になるだろう。

ところで、大学を取り巻く環境についてみると、18歳人口が減少し始める「2018年問題」に続いて、「2020年問題」（高大接続改革による入試制度改革）が浮上してきた。21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」（knowledge-based society）の時代であると言われ、高等教育においては、先見性・創造性・独創性に富み卓越した人材を輩出することが大きな責務となる。今後起こり得る様々な変化に対して柔軟かつ的確に対応するためには、福祉健康学部の若手人材の育成、活躍促進が重要な鍵になると考える。

2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催決定を一つの契機として、グローバル・ヘルスの視点から健康・福祉・教育に関わる研究活動を展開することが基盤的な力の抜本的強化につながり、地域社会に積極的に還元することが未来を拓くと考ええる。

今後、福祉健康学部の益々の発展と学部研究紀要の充実を心からお祈り申し上げます。

最後になりましたが、編集に携わって下さった編集委員長ならびに各学科紀要委員の皆様に深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。